
学校臨床の新展開

— ②② 此処じゃない何処かへⅡ —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

何しに来るんだろうか。学校へ。

教員「おい、いまごろ何しに来たんだ。」

生徒「・・・(無視)」

教員「そんなに勉強するのが嫌だったら、
学校来なかったらいいじゃないか。」

生徒「うっさい、ハゲ。」

教員「何しに来たの。」

生徒「きもいんじゃ。」

教員「帰りなさい。」

生徒「しばくぞ。」

昼前にやってくる中学生。ふらっとやっ

てきて教室で友人の顔を見て、連れ立って
校外へ出ていく。こんな光景をいろんな学
校で何回ともなく目にしました。

彼らは既存の学校システムの中では排除
される者たちです。集団で勉強をする場
には、それにあつたふさわしい姿勢、態度が
求められますが、彼らはそもそものところ
からなっていないと排除されるのです。心
ある多くの教員は彼らの背景を一定理解し
共感的にかかわろうとしますが、それを上
回る勢いで彼らから反抗や挑発があるため、
なかなかコミュニケーションが成立しませ

ん。彼らは、行く場を失い、街のほっとステーションなるコンビニの前に集まりますが、お菓子の袋を散らかしたり、タバコを吸ったりということになり、ほどなくコンビニから学校へ通報され、教員が大挙して押し寄せ、また「早く家に帰りなさい」「迷惑をかけるな」と追い払われます。そして、なかなか親が帰って来ない家などに集まったりします。

彼らのなかには、生活困窮家庭やひとり親家庭、保護者の疾病、被虐待児童、発達特性のある児童、外国籍など生活面で何らかの支援が必要な家庭の子どもたちが少なくありません。しかし、冒頭のようなやりとりが多いため学校教育のなかでは排除されがちです。また、たとえ、教室に入って授業に向かおうとしても、彼らの多くは、もはや授業内容についていけず、学習に対するモチベーションが低下しているだけでなく、劣等感や自己否定が支配しています。学校では、あの手、この手で彼らに学習習慣の定着をはかろうと、教員OB・OGや地域の有志の方々の力を得て、放課後の補習などに彼らを誘いますが、中学生ともなると、なかなかまじめに頑張ることに抵抗も出てきます。そんなとき、できるだけ小学校低学年のうちに、何らかの適切な支援につなげることができていればと思うことが少なくありません。そして、学ぶ喜びについても、できるだけ小学校のうちから感じてほしいなと思うのです。そのためには安心できる大人が傍らにいます。

家でも学校でもない

学童保育という場

2015年の春から、児童福祉法の改正を受け、いわゆる学童保育がこれまでの低学年に加え高学年までも対象とするようになりました。地域によっては、この改正により高学年のニーズが顕在化し、利用児童数が激増しているところもあります。そういったところでは、これまでと同じ施設のなかで、子どもの人数だけが増加するという状況のなか、すし詰め状況の施設もあります。新システムへの移行期でさまざまな課題に直面する学童保育ですが、家庭でも学校でもないもうひとつの「場」として、子どもたちにとってはかけがえのない生活空間、成長の場、出会いの場、学びの場となっています。しかし、学童保育は放課後からせいぜい18時30分ころまでの支援です。就労している親が18時や18時30分に家庭に帰っている状況というのはフルタイム就労では考えにくいのではないのでしょうか。このような場合、子どもたちは親が帰ってくるまでひとりで、あるいはきょうだいで待つか、それとも塾や習い事へでかけるということになります。経済的に厳しい家庭では塾や習い事に通わすことは難しいですので、子どもたちだけで保護者の帰りを待つということも少なくありません。さみしい思いを抱くという心理的な面だけではなく、食事や学習といった生活や学習習慣の問題も出てきますし、朝が起きられない、不登校にもつながってきます。

夕方から保護者の帰宅までを支援する児童福祉サービスとして「ファミリーサポートセンター（地域子ども子育て支援）事業」や「子育て短期支援事業（ショートステイ、トワイライトステイ）」があります。しかし、これらの認知や活用には大きな地域差があるのが現状です。

地域で子どもたちを育む

糸賀イズム福祉先進県といえる滋賀県では、昨年末から社会福祉協議会や社会福祉施設、民間NPO、大学生が協力し、「子ども食堂」や子どものための「フリースペース」を運営しています。子どもの利用を促すのは、各相談窓口だけではなくスクールソーシャルワーカーが大きな役割を担って

います。とくに画期的なことは地域によっては高齢者施設を活用して「子ども食堂」や子どものための「フリースペース」を運用されているということです。特別養護老人ホームではデイサービス事業を行っている事業所も多くそのスペースを夜間子どもたちのために活用されているのです。色紙などレクリエーションのためのグッズもたくさんあるし、食事もできるし、お風呂だつて入れる。確かにこれはすごい！

家か学校かではなく家でも学校でも塾でもなく、「評価」を抜きに存在をあるがままに受け入れてくれるもうひとつの場所ができること、「評価」を抜きに関わってくれるおばあちゃんや、おじさんやお姉さんがいることは子どもたちにとって明日への力となるのです。